学生主導型フィールドスタディ科目の課題と展望

柏　崎　　梢*

1．学生主導型フィールドスタディ科目：SFSとは

2016年度にShort-term Field StudyからStudent-led Field Studyと改称された、通称SFS（エス・エフ・エス）と呼ばれるこの科目は、2012年度に採択された文部科学省「グローバル人材育成推進事業」のもと2014年度に創設された科目であり、正式名称は「地域活動実習」および「国際活動実習」である。当科目は欧米の大学の教育プログラムとして実績のあるフィールドスタディ教育を参考にしており、国際地域学部の教育方針である現場主義に立脚した「地域づくり」を徹底すること、さらに大学が教育の柱とする「哲学」を学生が主体的に獲得することを目的とし（平成28年度SFS実施要領より）、「地域活動実習」は石川県能登地域、「国際活動実習は」タイ王国のバンコクとアユタヤを対象フィールドとしている。フィールドワークのモデルスケジュールは表１・表２を参照されたい。

当科目は事前教育、フィールドワーク、事後教育によって構成されており、最大の特徴は「教員の引率なし」でフィールドワークを行うことである。国際地域学部では、アジアから欧米まで幅広い充実した国内外の研修プログラムを持っているが、プログラムの充実とともに参加学生がどうしても引率教員に頼りがちになってしまうという懸念があった。あえてStudent-ledと変更したのは、SFS創設者の安相景教授の学生の責任感と自立心の醸成への強い想いが込められているのである。筆者は2015年度から両科目を担当しており、SFSへの参加者の増加、関心および成果への期待の高まりを受けて、2016年度の取り組みを中心に振り返りを行い、今後の展望を共有することを本稿の目的とする。

表１：「地域活動実習」モデルスケジュール（５日間）

１日目	午前	現地入り
	午後	能登定住・交流機構の案内のもと、「大学の森」の視察、間伐等の保全活動
２日目	午前	鵜野屋地区（限界集落）での聞き取り調査
３日目	終日	農家民宿を拠点とした地域調査、農家体験など
４日目	終日	農家民宿を拠点とした地域調査、農家体験など
５日目	午前	鵜野屋地区または門前町にて、能登定住・交流機構の監督のもと成果発表
	午後	帰京

※平成28年度SFS実施要領をもとに筆者編集

＊東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

表２：「国際活動実習」モデルスケジュール（10日間）

１日目	バンコク到着、ホテルチェックイン
２日目	チュラロンコン大学内「バンコクRDSオフィス」にてオリエンテーション、タイ語レクチャー、キャンパスツアー
３日目	運河上コミュニティ、都市スラム調査
４日目	バンコク市街地調査
５日目	アユタヤに移動、ラチャパット大学にてオリエンテーション、レクチャー
６日目	アユタヤ市街地調査
７日目	アユタヤ市街地調査
８日目	バンコクへ移動、発表準備
９日目	「バンコクRDSオフィス」にて発表
10日目	バンコク発、帰国

※平成28年度SFS実施要領をもとに筆者編集

２．能登とタイについて

SFSのフィールドが能登とタイであるのは、偶然でも恣意的でもなく、大きな理由がある。SFS創設者の安相景教授を含む、藤井敏信教授、髙橋一男教授・副学長らが中心となり、国際地域学部として関係を築いてきたという基盤があるということである。

能登については、2013年より石川県の支援のもと「能登ゼミ」として活動が継続されてきた。能登は、日本で初めて世界農業遺産に採択された地域であり、「里山里海」と称される自然と農業がたいへん豊かな土地である。厳しい環境ながら、ミネラルが豊富で今でも唯一海水を利用した塩田が残っている「外浦（そとうら）」と、穏やかで漁業や観光施設が整備された「内浦（うちうら）」の、両側面を持っている。2014年にNHK朝ドラ「まれ」の舞台として脚光を浴び、人気の観光地としてさらに魅力を放っている。しかしながら、近年の注目に限らず、能登には学生が活動するに価する、重要な歴史がある。かつての渤海国と活発な貿易を行っており、能登は日本のなかでも国際的な地域であったという側面である。東京の便利な暮らしとは異なり、不便ながらも豊かに生活している能登のくらしから、学生が学ぶことは非常に大きい。そして、これらの活動を支えてくれている能登定住・交流機構理事長の星野正光氏、同機構代表の高峰博保氏はかけがえのない存在である。彼らの地域に対する真摯な姿勢、学生への活動の意義と存在が非常に大きい。

タイは、2001年からアユタヤを中心に調査研究を行ってきた場所である。2006年には東洋大学国際地域学部のバンコクオフィスがバンコクに設置され、2014年よりチュラロンコン大学の施設内に移転している。タイは東南アジア諸国のなかでも唯一植民地歴がなく独自の文化を保ちつつ、1980年代以降急速な経済成長を経て中心国の脱却を図る国であるが、同時に格差問題や環境問題といった多くの開発途上国が直面する課題を抱えている。観光地化され斬新なビルが並ぶ表の顔と、ビルの裏で住民同士が助け合いながら生活しているスラムとの両方を訪れることができるのは、国際地域学部ならではの取り組みである。

能登とタイに共通するのは、⑴国際地域学部と長期に渡り信頼関係を築いてきたこと、⑵学生の活動を支援してくれるキーパーソンがいること、が非常に大きいということが分かる。

３．28 年度の取り組み

能登とタイをフィールドに、計 6 回 SFS として各地に学生を送り込むことが出来ている。ここでは 2015 年度以降に筆者が担当した計 4 回の経験が主になるが、活動が充実する一方で浮かび上がった課題を、現地、そして学生からの意見を反映してここで整理したい。

＜能登：現地より＞

・学生のテーマが似てしまうため、同じような質問が繰り返されてしまう

・移動手段が少なく、長距離の移動を手伝うなど、受け入れ側の負担が過剰になりがちである

＜能登：学生より＞

・事前に入手できる情報が少なく、現地で何ができるのか計画を立てるのが困難

・移動手段が限られており、活動の幅も限界がある

＜タイ：現地より＞

・英語力やコミュニケーション力が十分でない学生の場合、なにをやりたいのか意思疎通を取ることができず支援が困難

・チュラロンコン大学とラチャパット大学でのレクチャーやボランティア学生の手配、ＮＧＯ組織へのアポ取り、など、引率者不在の為、オフィススタッフの対外的な負担が大きい

＜タイ：学生より＞

・調査準備も英語でやる必要があり、事前準備の量が膨大

・チームワークが現地で重要になるが、それを築くだけの時間的余裕が足りない

これらの課題は非常に大きい。まず取り組むべきは、事前準備の重要性である。SFS の趣旨を理解させること、対象地域についての情報を理解すること、調査方法を学び、グループによって調査企画、調査計画、インタビュー項目、アンケート票づくりといった基礎的な部分に加え、現地でのマナー講座、タイ語学習、などやるべきことは膨大である。事前学習に使える講義時間は 1 コマ、1 週間に 90 分と限られており、一度でも欠席するとその学生は大きくが遅れることになる。さらに、同時進行で現地のカウンターパートと、随時調整を進めなくてはならない。

上記の課題を改善すべく、2016 年度に重点的に試みた改善策 3 点を、以下に紹介していく。

3-1：先輩たちの業績から学び発展させる

能登ゼミや SFS の成果物として刊行されてきた報告書のなかから、グループ毎の課題に近いものを選び、宿題として読み込ませ、授業内で発表させた。これは、東洋大学の学生がどのような調査を行ってきたのかを自ら学ぶことで、自分たちの現地での活動のイメージを作るのにたいへん役立った。また、こちらが予想していた以上に、厳しい指摘が出た。「テーマがありきたりで、ターゲットが絞れていない」「アンケートで調べたことが、結論に反映されていない」など、現場の苦

労を知らないが故か、辛口のコメントが並んでいくのである。

3-2：個性を活かすグループ分け

現場でチームワークが重要であることは、SFS 経験者から最も聞く声である。しかも、早い段階で行うことが重要である。グループ分けをする際に、参考とした指標は、⑴興味関心、⑵リーダーシップがあるかどうか、⑶フィールドワーク、海外渡航等の経験値、⑷語学力とコミュニケーション力、である。興味関心が近いもの同士が集まり、かつ学年、リーダー格、経験値、語学力が各グループ平均的に分かれるよう配慮した。なお、これらは授業開始時早々に学生から提出させるのだが、学生の意見そのままではなく、教員のほうで観察したことも含めて総合的に判断する。自分はリーダーに向いていないという学生でも、誰よりも率先して意見を言ったり、場の雰囲気を良くするような学生は、重要なリーダー格として考える。

なお、グループ分けは重要だが、コミュニケーションがグループのメンバーだけに偏らないよう配慮することも重要である。他のグループとの情報共有や協力が必要になるためである。そのため、事前学習の授業では、グループワークの時間以外において、全体の講義時間ではなるべく学生に全体の前で発表させる機会を設けたり、授業後に話し合う機会を作るよう心がけた。

3-3　現地での調査方法

調査方法は、社会調査法を参考に進めている。質的調査と量的調査があり、その組み合わせを推奨している。ただ、タイの場合は、言葉の壁があるためどうしてもアンケートに頼らざるを得ない場面がある。2016 年秋のグループで、アンケートは利用しないと決めたグループがあったが、それでは通訳をしてくれるタイ人学生に理解してもらうのも難しいということで、急遽作成したこともあった。タイの場合は、インタビューやアンケート以外に、参与観察、非参与観察、カウント、などを最大限活用することが重要である。どうしてもわかりやすいアンケート結果に頼りがちだが、観察したことの重要さを理解し分析し発信できるよう、事前と事後での指導が必要である。

写真１：民家での聞き取り調査の様子（2016 年 6 月能登 SFS）

写真２：最終日の調査発表の様子（2016 年 6 月能登 SFS）

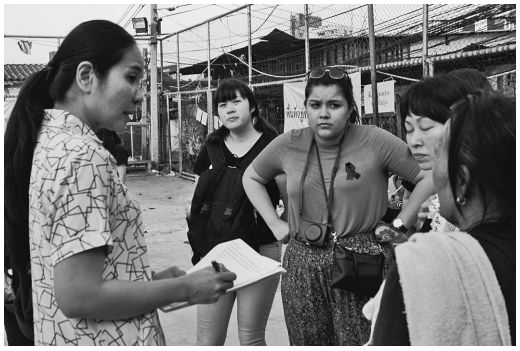

写真３：スラムコミュニティでの聞き取り調査の様子（2016 年 11 月タイ SFS）

写真４：最終日の調査発表の様子（2016 年 11 月タイ SFS）

４．改善策に対する学生と現地からの感想

⑴　４年女子学生（2016 年 SFS 能登）

事前学習の授業中に、以前 SFS 能登に参加した学生が来て話をしてくれたのが大変良かった。移動手段、農家民宿の特長、地域の人に対するマナーなど、行かなくては分からないこと、報告書だけでは分からないことが、良く分かった。また、こうして学生同士がつながることで、授業時間以外でもアドバイスを受けることができた。

チームワークは本当に大切で、SFS に参加する学生が一番最初に気にするのが誰とチームになるか、ということである。SFS は口コミで参加する学生が多いので、もともと知り合いであるケースが多いように思う。しかし、先生がそうした学生間の関係性を把握し、わざと仲良し同士を別にしたり、リーダー格の学生をそれぞれ配置してくれたので、最初は新たなメンバーとのチームに不安だったが、私たちとしては最高のチームを作ることが出来た。今回能登に行ったチームは、それぞれ個性がちがうものの、みんなよいチームワークを発揮していたように思う。また、チームだけでなく全体での交流も大切なので、スケジュールの前半が全体行動になっていることも良かった。

能登でアンケートをとるのは大変だったが、チームのメンバーと手分けしたり、質問者・記録者・カメラマンなど役割分担をしたことで、とても効率的にデータを取ることができたと思う。インタビューをしたこともなく、最初は恥ずかしがってなかなか話しかけられなかったメンバーが、最終日に近づくにつれ徐々に慣れていき、最後には自分から率先して動けるようになったのを見たときはすごいと思った。

⑵　３年男子学生（2016 年 SFS タイ）

SFS 能登に参加してからの SFS タイであり、また SFS タイに参加した人も SFS 能登にいたので、授業での取り組み以外にも、タイに行くにあたり気をつけるべき点についてかなり多くの情報を得ることができた。報告書の宿題は、英語ということもありかなり苦労したが、データをどのようにまとめるのか、結果を出すにはどのようなアンケートを作ればよいのかが良く分かり非常に参考になった。

最も重要だと思ったのがチームワークである。前回のSFS能登は4人のメンバーかつ唯一の男だったのでやりやすかったが、今回は6人、しかも4年生の先輩男子学生がいるなかでリーダーを引き受けた。最初は難しさを感じたが、SFSを経験していてリーダーシップおよびチームワークがどれだけ大切かを身にしみて分かっていたので、年下であるとか英語が苦手という意識はとっぱらって、必要なときに必要な行動を誰よりも早く取るなど、リーダーとしての仕事に専念することができた。

現地での調査はやはりアンケートに頼りがちになった。そもそも言葉の壁があるからである。ただ、アンケートに回答してもらって終わりではなく、お礼をいい、回答してもらった内容についてさらに質問したり、世間話をして話題を広げて観察したり、と、細かいデータをとるきっかけとしてアンケートを使うという方法があることが分かった。

⑶　バンコクRDSオフィス　研修コーディネーター　ソン氏（柏崎訳）

SFSに参加する学生は、タイに来るのも初めて、フィールドワークを行うのも初めて、という学生が多い。タイに来るだけでも大変なのに、引率なしでフィールドワークをするのには相当の準備が必要である。

これまでの実績を学んだ学生は、客観的にフィールドワークを展望することができ、より主体性をもつことができているように思う。比較対象があることは重要である。またフィールドワークの活動や成果は、チームによってかなり異なる。うまくいかなかったチームは、リーダーが不在であったり、役割が明確でないことが多い。そのため、チーム分けに最大の配慮を行うのは大いに賛同する。特に英語が得意な学生は、各グループに必ず一人はいるように心がけてほしい。2016年秋は、リーダー、副リーダー、に加え、会計係も設けた。これも重要である。また、事前に英語のプロフィールを送ってくれたのは、現地で準備する側として大変やる気がでたし、実際に役立った。感謝する。タイでの調査にはアンケートは必要だと考える。もしアンケートを使わないと計画するにしても、だれにどのようなことを聞きたいのかを、手伝ってくれるタイ人学生に説明するためにも、アンケートがあったほうが良い。しかしアンケートの作り方は訓練が必要で、教員と私たちで中身を何度も確認しなければならず負担も大きいことも理解しておかなくてはならない。

5．まとめと今後の展望

本稿で取り上げたのは筆者が担当した一部の事象と対策、そしてそれに対する感想に過ぎないが、SFSを継続するにあたっての課題と改善策を、当事者である学生、受け入れ側、送り出し側が共有することは非常に重要であると思われる。事前学習での工夫は一定の成果をあげた部分もあるが、やはりそれでも万全な準備といえるにはまだまだ理解と工夫が必要であると思われる。何を情報として提示し、何を学び、どこまでを計画するのか、を、協力いただく関係者の方々のお知恵を借りながら、更に考察し検討していく必要がある。またチーム分けについても、まだ検証の段階であり確証とはいえない。これについてはSFSに限らず対策されていることであるので、他プログラムや教員の方々と工夫や成果を共有しながら展開していきたいと思う。現地の調査方法につい

ては、そもそも学生がどの程度の能力を持っているのかを見極める必要がある。学生の得意分野や潜在能力を生かせるよう、これからも実績と照らし合わせながら工夫を継続していきたいと思う。

［参考文献］

1．芦沢真五（国際地域学部国際交流委員会 / グローバル人材特別委員会委員長）「平成 28 年度　SFS（Student-led Field Study）実施要領」2016 年
2．東洋大学国際地域学部「2014・春期 SFS 能登研修報告書」2014 年
3．東洋大学国際地域学部「2015・春期 SFS タイ研修報告書」2015 年
4．東洋大学国際地域学部「2015・春期 SFS 能登研修報告書」2015 年
5．東洋大学国際地域学部「2015・秋期 SFS タイ研修報告書」2015 年
6．東洋大学国際地域学部「2016・春期 SFS 能登研修報告書」2016 年
7．藤井満「能登の里人ものがたり－世界農業遺産の里山里海から」2015 年